

歴史的市街地における子どもまちづくり手法の考察 —「空堀子どもまちづくりの会」の活動を事例にして—

近畿大学大学院総合理工学研究所 森本 純一
近畿大学理工学部 脇田 祥尚

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

近年、都心部の歴史的市街地においてはめまぐるしく地域の風景が変化し、昔からの下町のようなたたずまいを残しながら、高層マンションが建ちつつある現状がある。そのような中で歴史的市街地に住む住民が自分の住む地域の現状を把握し地域を評価することによって、住民にとって住みよいまちとなる手法を検討する必要がある。

また最近の子どもたちはゲーム機の普及や塾通いなど、外で遊ぶ機会が減少することにより、地域の人や物にふれる機会が減っている。その現状の中で子どもに地域について学習する取り組みは注目されており、各地で行われている。それらの活動は子どもが地域に関心を持つことができるだけでなく、保護者をはじめとする子どもの周辺の大人もが地域を再評価する機会にもなりうる。子どもの成長の過程で地域を知りその現状を評価することは、将来にわたってその地域に住む場合、地域の将来を担う人材の教育にもなる。

本研究は、「空堀子どもまちづくりの会⁽¹⁾」の活動において、都市計画・まちづくりの視点から歴史的市街地での地域の特性を把握し、子どもたちが地域を知り評価できる子どもまちづくり活動の手法を考察する。

(2) 研究の方法と研究の位置づけ

「空堀子どもまちづくりの会」は、大阪市中央区空堀地区にて小学生を対象とした子どもまちづくりを実施した。平成20年11月から平成21年1月にかけて3回の子どもまちづくり活動を実施し、本研究は活動手法やこれらに参加した子どもたちの作品内容を分析し、子どもまちづくり手法を考察するものである。

地域を知り評価する取り組みとしてのまちづくり活動は木下¹⁾らによる活動など各地で見られ、子どもを対象とした活動も多く見られる。また倉原²⁾らや高見³⁾らをはじめとしそのまちづくり手法を論じる研究は多くなされているが、モデルをはじめとした子どもの作品を手法に盛り込むものは少ない。またまちの構成要素である住宅の模型制作と地区模型制作を活動内容に取り入れたものは管見の限りでは他に見られない。本研究では住宅模型や地区模型をはじめとした模型作成を交えながら、子どもが地域を知るまちづくり手法を考察するものである。

(3) 研究対象地の概要

大阪市中央区空堀地区は戦災を逃れ、低層の長屋や狭小な路地を移動通路とする、戦前での大阪市内では良く見られたまちの風景が現在でも残っている。他地域と比較しても路地と低層住居が多数を占め、低層の街並みと路地で構

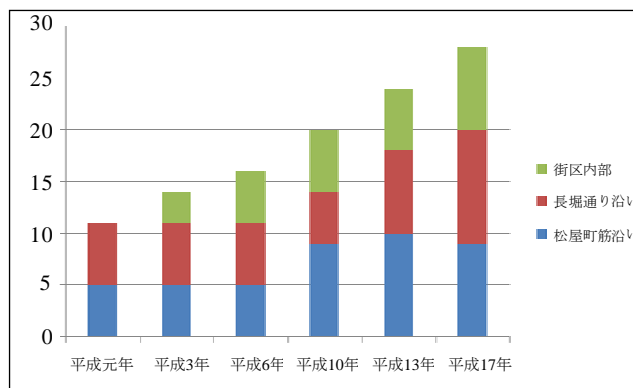


図-1 空堀地区中高層建築数の変化 (平成元年以降)

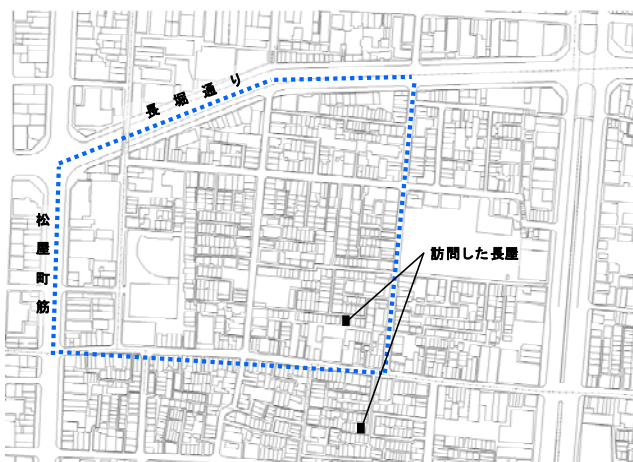


図-2 活動対象としたエリア (点線のエリア)

表-1 活動における仕掛けと評価

目的	効果	問題点
黄色封緘シール 自己紹介シート 写真館フレーム 発見シート 巨大マップ	指すものをわかりやすく 境内のメーヌスペースを自己紹介 まちの一部を切り取るおもしろさ まちで発見したものを明らかに 発見したものの位置をわかりやすくする	発見シートは多い、使いづらく注目された 参加者・スタッフとも把握することができた 境内での移動が滞りやすい おもしろくは化する まち歩き内で書き込みの範囲がすべてを網羅できなくなる 作業が解読でできる子が出てくる。落書きの嵐と化す
長屋模型キット 家賃シート 質問シート 家のタイトルシート	長屋に関心をもってもらおう 長屋模型を築き 住居に関する関心ごとを明確にする 発見シートで発見の位置が明確になる	作業を通じて考えをあきらめがなくなる 空間を自由に構成できる 普及の過剰化を避けて作業ができる どのようは効果のみ自分自身で確認できる 作業量が多く自由度がない 限られた道具しかなく制作が複雑になってしまう 過ごした方が作業がリンクしない タイトルがすぐにはない子がいた
まちの要所カード 地図模型 提案シート	建物群のまちへの関心を明確にする 提案を制作して明確にする 提案を文章で示す	各段でのテーマ及びコンセプトになる 形で提案が明確にできる 発見シートで提案が明確にできた 気づくもの位置づけがわかりにくい 制作の時間を十分に確保できなかった 文字と形を効果よく作業するの難しい



写真-1 訪問した古い長屋



写真-2 空堀立体地図模型

成されていることが空堀地区の大きな特徴である⁽²⁾。大阪市中央区は大阪市の中心部にあり、高層マンションが建設されるなど図-1⁽³⁾の通り中高層建築が増えている。特に、大通りに面しない街区内部の中高層建築が近年増加しており、空堀地区の風景は年々変化しつつある。

そこで空堀地区にて子どもまちづくり活動を行う際の予想される参加者の着目点として、他地域にはない低層の景観とヒューマンスケールな生活空間を創造する路地空間、路地空間を彩る様々な植栽があるとして活動内容を検討した。またまちの魅力だけでなく木造密集市街地である空堀地区が抱える問題の把握を期待し、長屋が集積し路地が生活通路となっている箇所を多く含むエリアを活動対象地とした(図-2)。

2. まちづくり活動の検討と位置づけ

(1) 各活動手法の検討

空堀地区の特徴を地域に住む子どもたちが気づくことができる、地域を評価できるまちづくり活動の手法を検討した。以下の①～③のように複数回に分けて活動を実施し、さまざまな活動を通じて子どもたちにまちを知る機会となるようにした。

①まち歩きによる活動

まずまちを知るためにまち歩きを行う。子どもたちがまちを知るためには、常に飽きさせない仕掛けや考えたことを示すことができるものが必要で、この活動では下記のような仕掛けを用意する。

- ・自己紹介シート
- ・発見したもの撮る額縁
- ・発見シート
- ・長屋訪問、見学
- ・巨大マップ

参加者同士普段交流がないことを考慮し、まち歩きの前には自己紹介シートを使用して、相互に自己紹介を行う。そして、まち歩きにより地域の特徴を知り、古い長屋(写真-1)を見学し普段立ち入らない古い建築空間を体験した上で、コンバージョンされた長屋を見学する。そして、まち歩き後は巨大マップを制作し、発見したものを視覚的に明確にする狙いがある。最初にまちを知ることは今後の活動における基盤となるものにとらえ、まち歩きを主体としたまちを知る活動を第1回の活動とする。

②長屋(住宅)模型制作

参加した子どもたち個人が地域や建築に興味をもつ仕掛けとして、実際に訪問し見学した長屋の建築模型を用意し、それらを自分が住むならどうするのか自由に提案・改造することによって、制作を通じた建築への興味や地域の古い建築の活用方法の提案を検討してもらう。また長屋という連続した住居を扱うことによって、大きな制約があり周辺の配慮を考える必要があることを認識させることを目的とする。子どもが建物を提案する際、考えやすいように自分の家での過ごし方や家の中で欲しいもの、将来就きたい職業を挙げてもらい、子どもたちはそれらをヒントに提案を検討する。

③地域の改善計画

対象地域に住む子どもたちが将来にわたって住むときに、現状を整理しながらどのような提案があると、自分が住みやすいまちとなるのか考えるワークショップ(以下WS)の場を設ける。

一般のWS手法ではまち歩きで得られた情報を直接整理しているが、今回のWSでは下記の仕掛けを検討した。

- ・まちの要素カード
- ・空堀立体地区模型(写真-2)
- ・まちの提案シート

実際に地区模型を改造しながら提案を考えることによって、より具体的で実現可能である提案が出ることを期待している。また班に分かれてグループ作業を行うことで、実際の地域まちづくりと同じ手法⁽⁴⁾をとり、地域はみんな協力して作るものであることを気づかせると同時に、まちの将来に対する提案を考えることにより、地域への関心を持つことを狙いとする。これらのWSを行うためには子どもの視点に合わせた仕掛けの準備が必須であり、内容と目的を整理すると表-1の通りとなった。

(2) まちづくり活動の概要

空堀子どもまちづくりの会は上町台地マイルドHOPEゾーン協議会の協力・助成を受けながら、空堀地区や周辺、また空堀地区になじみのある小学生を対象に、空堀地区についてのまちづくり活動を実施した。参加者は最大19人⁽⁵⁾で3班に分け、グループ行動形式をとり行った。活動は3回に分けて実施し、平成20年11月から平成21年1月にかけて実施した。「空堀こどもまちづくり」というテーマで実施し、まち歩き、長屋改造模型作成、未来模型作成の3回の活動内容となっている。

(3) 各活動の位置づけ

3回の活動での実施した詳細内容は表-2の通りである。まずはまちを知りそれを地図に示すことによりその発見を参加者の中で共有する。そして地域の古い建築を通じて、制約がある中で既存のものを活かすことを、実際に模型を使って考え提案し、最終的に地域の将来を検討するWSを行うことを目標とする。それぞれの活動に連続性をもたせることにより、参加する子どもたちがさまざまな角度から地域を知り、地域の将来を検討できるものとして実施するものである。

3. 子どもまちづくり手法の考察

各活動では参加した子どもたちの意見や考えをわかりやすくするために様々な成果物を作成した。第1回では巨大マップ、第2回では長屋改造模型、第3回は空堀未来地図模型である。この項目ではその成果物に着目し、分析を行うことにより、参加した子どもたちがまちに着目した部分、提案を整理することにより、子どもまちづくりにおける留意点や効果をここでは明らかにする。

(1) 第1回 まち歩き

3班に分かれ、まち歩き・長屋訪問を行い、5m四方の巨大マップに発見した事柄を書き込んだ。まち歩きでは発

表-2 各活動の内容

空堀子どもまちづくり第1回WS 2008年11月15日(土)実施				
遊び	時間	内容	必要もの	
準備	会場設営	8:30 (15分)		
受付		8:45 (15分)	・会場建物入り口に参加者は集合 ・会場でイスが並んで待機 ・自己紹介シートを記入してもらう	参加者名札 参加者用冊子
導入 (30分)	①あみさつ	9:00	・空堀の説明	紹介用ワーポイント
	②WSの前の説明 ③班での自己紹介	(40分) 9:10 (20分)	・子どもまちづくりの説明 ・スタッフ自己紹介 ・グループに分かれて自己紹介 →1学期おこえて、空堀との関係 →どこに住んでいるのか	自己紹介用画用紙 横書き マーカー
本編 (120分)	①まち歩き	9:30 (70分)	・グループ別でまち歩き →おもしろいところ →遊んでみたいところ →危ないところ ・気づかされたところを写真撮る	デジタルカメラ 参加者用地図 筆記用具 プレート
	②長屋訪問 1班 10:00~10:20 2班 10:10~10:30 3班 10:20~10:40		・未だ長屋見学 ・改修長屋見学	ビニールシート マジック等筆記用具 ガリバーマップ
	休憩	10:40 (10分)	・紙コップに飲み物提供	参加者用の飲料
	③各班による巨大マップ作成 ④発表準備会議	10:50 (40分)	・マップの説明 ・まち歩きの内容を自由に書いてもらう	素材 マーカー、のり、テープ
発表・まとめ (20分)	①まち歩きの結果の発表	11:30	・グループ別で結果を発表	指さし棒(2本)
	②まとめ	(20分)	・発表者はマップの上で発表 ・まち歩きのまとめ	
	解散	12:00	・次回のWS参加の案内	
片付け				

空堀子どもまちづくり第2回WS 2008年12月13日(土)実施				
遊び	時間	内容	必要物	
準備	会場設営	8:00 (30分)		
受付	受付開始	8:30 (30分)	参加者が来たら名前を確認し、会場案内促す	・名札
導入 (30分)	①あみさつ	9:00~	・空堀子どもまちづくりの会の活動方針の説明(横書き)	・横書き紙
	②WSの前の説明		・全体のWSの前の確認(横書き)をして全体を通しての位置づけを知る	・ノートPC
	③前回の振り返り		・今日(WS2回目)の前の説明(横書き)	・プロジェクター
	④改造の完成イメージを共有 ⑤グループ調整		・見学した長屋の様子を振り返る(スライド) ・長屋の改造事例を紹介して、イメージを共有し 今日の到達目標を確認する(スライドとモデル模型)	・指差し棒 ・延長コード
本編 (120分)	①グループ内であみさつ	9:30~	・お互い名前自己紹介を行う	・長屋キット
	②改造計画		・簡明瞭に記入してもらい、それを基にどんな家にするのかを考える。模型改造と取りかかす	・家キット
	③模型改造(前半)		・部屋の取り決め	・簡明シート
	④途中休憩		・途中休憩をお互いに確認し合う。お菓子、ジュースの配布	・改造道具
	⑤模型改造(後半)		・家具の配置、外観のデザイン、仕上げを行う	・改造材料
	⑥自分の模型について一言記述 ⑦発表準備会議		・自分の改造のタイトルをつけて、シートに記入する(力を入れた場所、特徴、感想など) ・発表者を班ごとに2名決める	・画用紙 ・マーカー、色ペン
発表・まとめ (30分)	①作品観覧	11:30~	・他のグループと他班の改造模型を観てまわる(7分)	・タイトルシート
	②作品発表		・各班が2名ずつ、記入シートを基に自分の改造した家について発表する ・発表する際1家のどこで、どんなことをするのかなどを模型を使って説明する	
	③まとめ		・発表の内容やWSの全体結果についてスタッフがまとめる ・次回の参加の案内	
片付け 会場直し 片付け				

空堀子どもまちづくり第3回WS 2009年1月17日(土)実施				
遊び	時間	内容	必要物	
準備	会場設営	8:00 (30分)		
受付	受付開始	8:30 (30分)	参加者が来たら各班のテーブルに誘導、個別の内容を促して説明	・名札
導入 (30分)	①あみさつ	9:00	・今までのWSの内容を簡潔に振り返る説明(横書き)	・横書き紙
	②まち歩きの振り返り		・対象地域のまちの要素の写真カードを元に各個人の考えをまとめる →「残したいもの」「直したいもの」「気づかされたもの」の3つに分類 ・まちの要素カードの分類を基に、地図模型はシールで分類した評価のシールを貼る →「残したいもの」:赤、「直したいもの」:青、「気づかされたもの」:星	・地区模型
本編 (100分)	①各班でのテーマを設定 ②テーマに応じて未来のまちの提案 ③提案内容を提案シートに書き込む ④提案内容を地図模型に作り込んでいく	9:30	・提案内容を横書きで書き出しながら検討を行う →地区模型を使いながら検討の検討 ・提案がまとまると提案シートに内容を書き、その内容を模型の中で表現	・提案シート ・模型材料 ・マーカー、色ペン ・画用紙
	発表・まとめ (40分)	①自由に各班の内容を見て回る ②各班による提案内容の発表	11:10	・横書きの内容を発表し、作った模型を示しながら発表を行う ・各提案を提案した子どもが発表する
終了証書 (10分)	①各班ごとに班長より授与	11:50		
	②記念撮影 解散	12:00		

見したものを額縁越しに撮影して風景を切り取り、さらに発見シートにその内容を書き込んだ。巨大マップには各班の歩いたルートとともに、発見シートと発見したものの写真を発見した地図上の場所に貼り付けた。参加した子どもたちの発見シートに書き込まれた視点を自然、路地、日常、古いもの、建物の5項目に分類すると図-3のようになった。その結果注目したものには路地が多く、これは路地空間で発見した事柄を含んでいる。車社会の中での通行路としては狭小な通路であるが、そのヒューマンスケールな通路だからゆえに子どもたちにとっては発見しやすい、注目した場所となっていることが分かる。また家々の植栽や道端の草花に着目するものも多く、子どもは自然のものに多く注目することも分かる。一方で建物に着目したものは少なく、身長の高い子どもたちにとっては、見上げる存在である建物にはあまり注目しなかったことが分かる。

(2) 第2回 長屋改造模型作成

第1回の中で訪問・見学した古い長屋をモデルとした長屋模型を用意し、参加した子どもたちに自分が住むならどのように改造するのか提案してもらった。模型では壁や屋根等の長屋の構造躯体だけでなく、壁や家具、植栽といったストラクチャーも用意し多様な提案を可能にした。参加者一人一人が提案し制作し、その制作内容は表-3の通りである。1階部分を店舗にする提案が多く、自分のなりたい職業を実現する提案が多く見られた。その中で、路地側の屋根をカラフルに、また階段を路地の裏側にするとといった、路地を近隣コミュニティの場とし、周辺に配慮する提案が多く見られ、子どもであっても自分が住む場を中心に周辺環境への配慮を行うことができることが分かった。また植栽を取り入れるものが半数ほど見られ、第1回でも分かった通り、参加した子どもたちの自然への関心が高い。

(3) 第3回 未来地図模型作成

はじめにまちの構成要素を7つ挙げ、「残したいもの」「気になるもの」「直したいもの」に分類する作業を行った。整理したものが図-4で、「残したいもの」「直したいもの」として挙げられた数が多い要素は、参加した子どもたちの考えがはっきりしているもの、「気になるもの」に挙げられたものは、考えがはっきりしていないが関心はあるものであるととらえることができる。日常的によく使う公園の関心が最も高く、一方で訪問見学を行い、模型制作を行った要素である長屋に関しては注目が低いことが分かった。また路地や駐車場に関しては「直したいもの」として大きく挙がっている。子どもの目線の中で、有効に活用されていないと感じるものが挙がっていると言える。また第1回、2回で注目度が高かった自然である植栽に関しては注目されているが、明確な評価はされておらず、地域の問題点を明確に認識する一方、自然に関する明確な意識が薄いことが分かる。また各班でのまちの構成要素への関心を踏まえながら将来の地域のテーマを班ごとに決定し、WSで出た提案を環境、災害、景観、自治の4つに分類し、それらの各班のバランスは図-5のようになる。3班は高学年の子

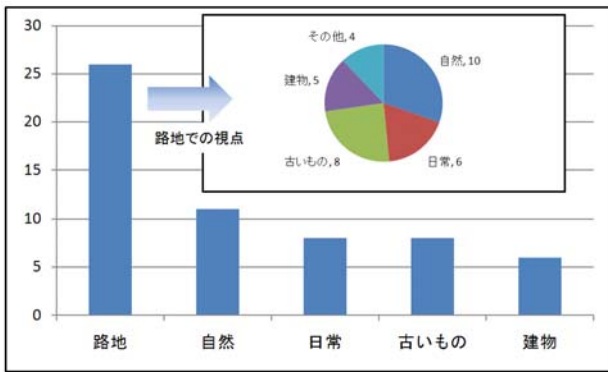


図-3 参加者のまち歩きでの視点 (重複あり)

表-3 制作した長屋模型の内容

番号	タイトル	1階	2階	3階	階段	着目点				特徴
						増築	店舗	植栽	家族	
長屋1	屋根裏部屋のある家	台所	居間	寝室	前	○	—	○	—	階を築いで増築(倉庫) 屋根裏部屋を増築 屋根形状を変更 正面に植栽
長屋2	3階建てのエコハウス	台所	寝室	居間	後	○	—	○	—	屋根裏部屋を増築 屋根に椅子を設置 正面に植栽
長屋3	カラフルないつもの家	居間	寝室	—	後	—	—	—	○	自分と弟の部屋をカラフルに 居間には家具を多く配置
長屋4	1階にお店がある家	店	住居	—	前	—	○	○	—	裏庭に植栽 チェックのじゅうたん 裏庭から店が見える
長屋5	いろいろな模様がある家	台所	寝室	—	中	—	—	○	—	1階に水廻りが集約 裏庭に植栽 ベッドが机がカラフル
長屋6	ペットショップ	店	住居	—	後	—	○	—	—	好きな動物を扱っている 多様な色を使って店を表現 好きな色が居室壁色 表の屋根はカラフルに
長屋7	新しい家	店・住居	住居	—	後	—	○	—	○	雑貨屋 家族配置を検討している 店内にはショーケース 寝室にはTV
長屋8	ペットショップ	店	住居	—	後	—	○	—	—	裏屋根をデザイン カラフルな屋根 店内は賑やかに 寝室には書い壁
長屋9	ケーキ屋さん	店	住居	—	後	—	○	—	—	表には大きなショーケース ベッドがカラフル 生活機能は2階に集約
長屋10	ペットショップ	店	住居	—	後	—	○	—	—	カラフルな店内で明るい 裏側の壁はガラスで明るい 表の屋根はカラフル
長屋11	オシャレな家	住居	寝室	—	後	—	—	○	—	裏庭には多くの植栽 自分の部屋を大きく
長屋12	ケーキHOUSE	店	住居	—	後	—	○	○	—	産前には大きなロゴ 表屋根にロゴ 側面に大きなロゴ 庭園にはシャワー
長屋13	MY HOUSE	住居	寝室	—	前	—	—	○	○	正面に植栽 家族が楽しそうに生活 屋根にスライプ模様 側面に大きなロゴ 2階裏部分に寝室
長屋14	和菓子屋	店	住居	—	後	—	○	○	—	表にショーケース 店内から植栽の多い裏庭が見える 裏庭にもテラス設置
長屋15	ふつうの家	居間	寝室	—	後	—	—	○	—	裏庭側をガラスにすることで室内が見渡せる 裏庭に植栽 キッチンが裏庭に面している

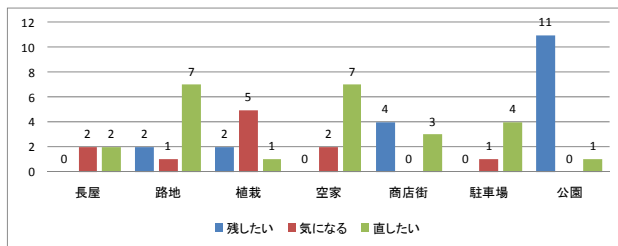


図-4 まちの構成要素への評価

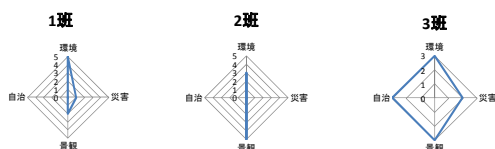


図-5 未来地図模型WSで提案された内容バランス

どもが集まっており⁽⁶⁾、バランスよく提案されていることが分かる。さらにハード面だけではなくコミュニティへの提案があるのも特徴である。一方で学年が下がると着目点に偏りがあり、またハード面の提案が多くなる。ここでも第1回、2回同様、環境や自然に対する提案が多い。

4. まとめ

実際にまちを歩き、イメージを持ちながら模型を使った活動を実施することにより、考えがまとまらない子どもはいなかった。まち歩きの結果、自分の足元にある自然をはじめとした物事に着目する傾向があり、空堀地区に多く見られる路地空間での着目が多く目立った。一方で長屋模型を使った住宅提案を活動内容に盛り込んだが、地区の将来提案の際には、長屋をはじめとした建築物への関心は多くは見られなかった。本研究の活動手法を通じて、子どもたちはまちの中の自然や身近なものを通じて魅力や問題点を発見できることが分かった。また長屋を使った住宅提案の際では制約のある中で空間を構成でき、また周辺環境についても考慮することができる。

空堀地区のような路地を含む歴史的市街地においては、路地空間を子どもまちづくりの対象とすることで、物事を発見しやすい狭小空間であることから、地域に大きな関心を持つ機会となることが期待される一方、建築物に対して関心を持たせるためには十分な検討と配慮が必要であることが分かり、その手法を明らかにすることが課題である。また子どもが地域へ関心を持つような取り組みは長期的に行い、その成果をまとめる必要がある。

補注

- (1) 建築を学ぶ学生を中心に組織し子どもを対象とするまちづくり団体
- (2) 川窪⁴⁾は桃園地区(本研究での対象地である空堀地区を含む)が周辺地区の中で最も町屋(長屋等の古建築)の残存率が高いことを明らかにしている
- (3) 空堀地区が2階建以下の建物が多い低層市街地であることを考慮し、1991年以降の住宅地図⁵⁾より図-2で示した範囲内における3階建て以上の建物を抽出した
- (4) 一般のまちづくりワークショップでは、多数の人々の意見をKJ法でまとめる等の作業を行って結論を導くものであると解釈している
- (5) 各活動で参加人数が異なり、第1回は19人、第2回が15人、第3回が16人参加した
- (6) 1班が4年2人、3年3人、2年2人、2班が4年1人、3年1人、2年2人、3班が5年2人、4年3人の構成であった

参考文献

- 1) 木下勇(2007)「ワークショップ 住民主体のまちづくりへの方法論」、pp101-107、学芸出版社
- 2) 倉原宗孝、後藤由紀、日景敏也(1996)「子どもたちの体験学習による住民参加のまちづくり促進に関する考察」、日本建築学会計画系論文集第483号、pp179-188
- 3) 高見裕子、平川隆啓、脇田祥尚(2005)「小学生を対象としたまちづくりワークショップ手法に関する研究-大竹市の事例-」、日本建築学会中国支部研究報告集第28巻、pp745-748
- 4) 川窪広明(2004)「空堀商店街周辺の町屋と祠の変遷-1977年と2003年の調査に基づく比較-」、平成16年度日本建築学会近畿支部研究報告集、pp69-72
- 5) 「大阪市住宅精密地図中央区(1991、1994、1998、2001、2005)、吉田地図株式会社